

無残な町「津波ですべて無くなった」

現地へすでに3回 民家のガレキ除去

5月に入って3回も現地へ出かけたのは中林清さん(国15)。1回目は6~9日に石巻市へ。2回目は13~16日に東松山市

と雄勝町へ。3回目は6月3~5日に宮城・山元町へ。いずれも単独で、自治体などが募集した救援バスを利用しました。片道1000キロ以上、15時間ほどの行程です。

現地は地震より大津波による被害がほとんど。家の倒壊は免れても、1階はめちゃめちゃに壊れ、家具や漂着物が堆積してと

ても住める状態ではありません。10人ほどで民家の家具・ガレキ撤去、床下のヘドロ出し作業をする日々が続きました。

北上川河口の雄勝町では、漁港付近の漂着物を片付け重機を通す進入路を作りました。材木などの漂着物に魚網が絡まって難航。汗と埃でドロドロになりながら手も洗えず、帰路についたことを覚えています。

やむを得ないこととはいえ、被災者が求める作業内容と、私たちがスタッフから聞かされていた内容とがまるっきり違うこともありました。3回目の山元町では、床下の泥出しと聞いていたのに、先方は大工さんを待っていたらしい。大工道具なんて何もなく、歯がゆい思いをしました。スタッフ間の連絡・連携のまずさ、融通の利かないお役所仕事はボランティア泣かせですね。ただ、スーパー、コンビニは営業しており、食事には困らなかったし、宿泊も主催者がホテルなどを手配してくれて心配なかったそうです。

現役時、建築関係で耐震設計を手がけていた中林さん。3回も現地へ行ったのは「少しでも被災者に役立ちたい」という熱い思いとともに、現地の状況を肌で感じて来て、現在やっている〔人と防災未来センター〕のボランティア活動に生かしたいという理由からです。



勢ぞろいしたボランティア。中央手前が中林さん

「高いお金をかけて、家の耐震補強をしたのに、津波には何の役にも立たなかった...」。がっかりした持ち主の言葉が一番こたえたそうです。

「時間と少し体力のある方なら、60代でもOK。経験・知識があり、若い人をリードできるから」とカレッジ生に東北行きも勧めています。中林さんのブログに震災リポートが載っています。〔うはらのさと から〕で検索してみてください。

単独で駆けつけた山男

「テレビで惨状を見ていて、居ても立ってもいられず」単独で釜石まで駆けつけたのは、東窪紀行さん(生9)。山男で体力に自信があったので、3月27日から4月3日まで6日間にわたって、避難所で活動してきました。

東窪さんは単独行に慣れており、テントや1週間分の食料、水20リットルを車に積んで27日に出発。途中、新潟県下で1泊。28日朝、釜石駅近くの「ボランティ



ア受付所」に顔を出しました。「何でもやります」と言ったところ、釜石市立のぞみ病院の避難所を指定されました。100人ほどの炊き出しを市職員とボランティアら6人で担当するのです。メニューは、おにぎり・みそ汁・パンなど。まだ食材は十分でなく、自衛隊から融通してもらうこともありました。3日目からは、物資集積所でガソリン・灯油の仕分け作業をしました。

避難者とじっくり話す時間はなかったそうですが、「水没した保育園の子供たちが無事、逃げのびたという話を聞きました。前日に避難訓練をしたそうで、園長さんのお陰と噂になっているようです。唯一、明るい話題でしたね」。

「港町・釜石の光景は無残の一語です。地震というより津波で何もかも無くなってしまった。そこが、阪神大震災と一番違うところですね」と印象を話してくれました。(釜石の避難所で炊き出しをする東窪さん=中央)